平成 29 年度　第３回　昭島市民図書館協議会
（兼第２回子ども読書活動推進計画評価等会議）
会議録（要旨）

［開催日時］平成 30 年１月 25 日（木）　18：30～19：40

［開催場所］昭島市民図書館　２階　閲覧室

［出 席 者］

1　委　員：真如会長、美坐委員、新井委員、吉野委員、
大串委員、本多委員、山川委員、大野委員
2　事務局：石川市民図書館長、磯村新図書館担当課長、井上係長、小澤係長

［欠 席 者］原田副会長
［議事要旨］
1　開会
2　会長あいさつ
3　議題
（１）　平成 29 年度昭島市民図書館事業の進捗状況及び今後の予定について
（(仮称）教育福祉総合センター建設工事の進捗状況含む）
（２）　平成 30 年度昭島市民図書館運営方針（案）について
（３）　第三次昭島市子ども読書活動推進計画の推進について
4　その他

［配布資料］
資料１　平成 29 年度昭島市民図書館事業の進捗状況及び今後の予定について
資料２　ＬＬブックについて
資料３　平成 30 年度昭島市民図書館運営方針（案）
資料４　平成 30 年度昭島市民図書館年間事業計画（予定）
資料５　平成 30 年度昭島市民図書館の事業
資料６－１　平成 30 年度子ども読書活動実態調査について
資料６－２　平成 30 年度子ども読書活動実態調査（小学校）
資料６－３　平成 30 年度子ども読書活動実態調査（中学校）
資料６－４　学校図書館の整備充実について（通知）

［発言要旨］

３　議題

（１）平成 29 年度昭島市民図書館事業の進捗状況及び今後の予定について

（(仮称）教育福祉総合センター建設工事の進捗状況含む）

事 務 局　※資料１、※資料２、(仮称）教育福祉総合センター建設工事の進捗状況の説明

会　　長　ＬＬブックの説明があり、皆さんのお手元にＬＬブックが配られているが、絵本をお描きになっている本多委員、いかがか。

委　　員　字が読みづらい子どもたち向けのようで、文字数が少ない。この本は、そのような子どもたちでなくても非常に関心を持つ内容になっている。概念的な本ではなく、写真がとても優れていて、言葉が非常に端的でわかりやすい。素晴らしい作りになっている。

先程拝見したが、蝉になれるというか、臨場感を持って入れる。言葉の概念ではなく、そのものを見ている、そこに入っていける。子どもたちに読み聞かせしたいくらい。

私の手元にある本には、白い絵皿に蝉の抜け殻が置いてあるが、私が子どもっぽいのかもしれないが、これを見ると、生きているような不思議な世界。

もっと面白いのは、足が少し折れていたり、短かったり、すごくリアル。イメージも湧かせてくれる。写真の力は凄い。何よりもいいのは、文字数が少ないこと。

小学生は視覚的な入り方として、体全体で入る。少し大きいくらいだが世界に入れるのでちょうどいいのではないか。このような取り組みは、思いやりの気持ちなども出てくるので、是非徹底的におやりになった方がいいと思う。

会　　長　他に意見はあるか。

委　　員　意見なし。

会　　長　次の議題に移る。

（２）平成 30 年度昭島市民図書館運営方針（案）について

事 務 局　※資料３、※資料４、※資料５の説明

会　　長　意見、質問はあるか。

委　　員　予算額について。子ども読書の関係が 19 万円、障害者向けが 100 万円程だが、高齢者が 28,000 円、今年度も１万円でやけに少ないような気がする。

やはり高齢者向けの事業は少なくなってしまうのか。

事 務 局　障害者サービスを行うなかでは、録音図書の音訳・校正、編集作業がある。それから対面朗読と、それぞれ時間をかけて行っている。本図書館は「障害者差別解消法」が施行される前からサービスを実施している。お金が掛かるからと

いってそれらを取りやめることは考えていない。いろいろな方々に利用していただきたいと考えて進めている。

委　　員　私も以前、図書館に勤務していたので障害者サービスが重要だということは重々分かっている。

会　　長　予算に出ないところでの高齢者向け事業が充実されることをお願いしたい。

委　　員　高齢者向け事業について。ＮＨＫで「認知症の方に対するサービス」という番組があった。認知症の方々に対するサービスというのは、番組で取り上げていたものだけではなく、鳥取大学医学部の先生が提唱されている「みんなで本を読む」ということも非常に効果がある。それはお金が掛からない。むしろ、大型活字本を数冊買って、来ていただいて、みんなで声を出して読んでいただくという事業。そのように、お金の掛からないところでできることは、障害をお持ちの方々も、子供向けもそれぞれあると思うので、図書館で工夫していただくといいのではないかと思う。

オランダでは、55 歳を過ぎると「図書館で読み聞かせのボランティアになるように」という勧めを、国を挙げて行っている。

東大がまとめた高齢者向けのテキストブックの著者の講演では、東大の杉山先生が、6,000 人を対象に追跡調査したところ「高齢者は部分的に体に問題があるが、75 歳までは普通に生活して仕事ができる。」とのデータが出た。それ以降は、男性は急激に落ち込み、女性は徐徐に落ち込む。骨の構造や筋肉の出来具合でそうなるそうだ。男性は 15%が 100 歳近くまで元気に普通にお仕事ができる状態でいらっしゃる。そういう意味では、高齢者の方々の活用を考えた方がいい。

ニッセイ保険という会社は、定年が 80 歳。ただ、週２日フルタイムの勤務など、条件はいろいろあるらしい。いずれにしろ「定年を 75 歳まで延ばさなければいけない。」と東大の先生はおっしゃっていた。

日本経済で企業収益がどんどん上がっているのは、65 歳でお辞めになった方を積極的に雇用されていて、賃金の差が利益となって上がっているという分析がある。最近は 60 歳定年でも 70 歳までお勤めになるということも増えているようだ。

図書館は、そういう方々にボランティアになっていただくとか、経験されている方にはカウンターに入っていただくとか、お役所をお辞めになる方は全員子どもの読み聞かせの講座を受講してもらうとか、お仕事を辞めても、図書館や地域に関わるようなことを進められるとよろしいのではないか。

会　　長　人生 100 年と言われはじめて、本当に大変。やることをしっかり計画を立ててやっていかないといけない。

お話があったのは「高齢者向け」とは２通りあるということ。高齢者に「向けて」読み聞かせをすることと、高齢者「自身」がボランティアになったりする

ということ。昭島市も老人ホームが増えているので、そこでもニーズがあるかもしれない。喜んでもらえるような周知や啓発があってもいいかもしれない。

委　　員　今の小学校４年５年生あたりは、将来 105 歳まで生きられるらしい。だから、小さい子から「長く生きる。」ということを教えないといけない。それから、笑うということは、脳の活性化に非常にいい。明るく笑うということを社会的にも勧めた方がよろしいのでは。

会　　長　それについては図書館では何ができるか考えていただいて。
予算があればそれに越したことはないが、お金の掛からないところでいろいろ進めていただけると、市民の皆さんが喜ぶのではないかと思う。

事 務 局　高齢者のサービスというところでは、本図書館では高齢者サービスが始まったのはまだ歴史が浅い。
昨年制定した基本方針・基本計画でも高齢者サービスを充実させていこうということで、方針にも載っている。お金の掛かる、掛からない、サービスを提供するのか、労力を提供していただくのか、協働というかたちも当然あるので、今後いろいろなかたちで膨らませていけたらと考えている。

委　　員　規定が難しい。私は 73 歳だが、高齢者に見えないでしょ？
若い方々は年寄りと思うかもしれないが、高齢者には年寄り感覚は全然ない。だから対応の仕方を誤ると、怒る。年寄りというイメージを何歳くらいと考えているのか。「60 代 70 代はまだまだ現役」と言われても「当たり前だ」と思う。80 代の方も「冗談じゃない」と思っているかもしれない。そのあたりを考えながらやらないと、活躍してもらうにしろ、サービスするにしろ、間違えてしまうのではないか。

事 務 局　基本方針にも載せているが、ライフステージが移行していくという考え方かと思う。お勤めを終えられ、また違う時間ができたとか、段階で見ていく。
その時々の時間の使い方などに着目していくことが大事だと思う。

（３）　第三次昭島市子ども読書活動推進計画の推進について

事 務 局　※資料６－１から６－４の説明

会　　長　資料６－１。調査期間については年度が改まって４月から５月。第２回図書館協議会兼子ども読書活動評価等会議で実施状況を検証するという予定がある。
小学校と中学校とでは、昭島市の学校事業が違うということで、指導課長ともお話をされ、項目が多少違っている。

会　　長　小学校１－サについて。図書館職場体験はどこかの小学校はおやりになっているのか。

事 務 局　毎年市内小学校から職場体験の申し込みがあり、実施している。本年度も２校実施した。

会　　長　他に意見はあるか。

委　　員　今回意見を求められているのが小学校、中学校だけだが、幼稚園、保育園、高校は実施しないのか。

事 務 局　調査対象は資料６－１でご説明したように昨年度と同様に行う。
子ども読書活動推進計画は、子どもの成長に従った取り組みを求めているので、質問項目が違った調査表を作成する。

会　　長　ここでは提案されないが、調査を行うということで。

委　　員　教育内容に関わることなので、慎重に考える必要があるが、平成 16 年に文部科学省、文化審議会が「これからの時代に求められる国語力について」という答申がある。これに関わった委員が、答申発表の時に、小学校も中学校も高等学校も大学も、それぞれの先生が、授業が始まる前に、その授業に関する本はこういう本があるというのを生徒や学生にきちんと紹介するようにするといいと、答申の内容に関連して述べていた。
これを実践しているのは、東大駒場。先生方がおやりになっていて、それらをまとめた本がある。これに関連してひとこと。先生方が、自分のテーマに関する本に「このような本がある。」とか何処にあるとかを最初の時間に説明しておくと、生徒たちが本を読む手助けになる。それをブックトークというが、それを行っているかという項目をどこかに入れてはどうか。

会　　長　１－アの項目にブックトークなど細かい手法が入っているが、授業の中でということか。

委　　員　授業に則して授業教科の内容の本を紹介しているか、ということがあった方がいいのではと思う。

会　　長　たとえば、各教科の単元の前段階や、終わってから「これに関連する本があるよ。」ということも含めてか。

委　　員　そう。高校の教科書には、出版社によってはそういうことが書いてある。

委　　員　一つの例として、高校では、たとえば修学旅行では、修学旅行担当の先生と司書が相談をして、図書館本というかたちではあるが、先生の意見も聞きながら「図書館にこういう関連本がある。」と毎回紹介する。
授業でも、特別なテーマの際は、図書館側は利用してほしいので、一生懸命「どんな本が必要なのか教えてください。予め買います。」とお話しする。
そのようなかたちで高校の段階では、折に触れて、保健の授業や国語の特定の作家や、テーマ読書などで本の紹介はしている。それは教科の先生とも関連で行っている。たぶんそういうことが、小中学校でも司書がいればできるのではないかと思う。
やはり最後は人の問題に行き着くが、小中の先生がブックトークで本を紹介するときに、図書館に行ったり、本屋に行ったりしてブックリストを作るという

のは、恐らく時間的にも厳しいものがあるかもしれない。

会　　長　もうなくなってしまったが、昭島市の小学校には学校図書館研究部というものがあった。そこでは、各学校一人ずつ研究部に入っていたので、そこから発信して広げていて、市民図書館の職員とのブックトークのための本の提供の連携もすごくいい感じで取れていた。

おそらく、そういうことは凄く大事で、なくなってしまったので、それをいかに繋げていくか考えていかないといけない。

事 務 局　そのあたりは一つの課題である。

今、委員から言われた単元の紹介については、貴重なご提案であるので、負担にならないようなかたちで質問項目に入れるか、指導課と再度相談し、対応させていただきたい。

会長がおっしゃった月１回の取り組みだが、塩尻市はそれを行っている。会長や委員からもお話があったので、先生方は忙しいという状況を踏まえ、何らかできないかと指導課と相談したい。

委　　員　小教研の図書館部会を小学校だけでしていて、図書館側は夏休みの読書の宿題が何かも全くわからなくて、出ている本も３週間借りられてしまうと、全然回らなかった。そこで、10 年前から小教研へ毎月１回、図書館からも行き、勉強したり、検討したりして、夏休みの本に関しては１週間の貸し出しに決めて、たくさん本を揃えるようにしていた。先生方が忙しいということもあるが、小教研で図書館部会がないということが問題ではないかと思う。せっかく毎月１回連携していたところが、かなり進まなくなっているなと感じているので、そのあたりを是非お願いしたい。

事 務 局　貴重な意見をいただいたので、指導課と再度調整させていただきたい。

委　　員　私も文科省の委員をやっていたから何とも言いようがないが、資料６－４については、実は、２回にわたって協力者会議を開いており、そのまとめとしてこれを出した。中身はどのようなものかというと、「学校司書の資格と要請について」「職務内容について」この通知の中では、ちゃんと学校司書を学校図書館に置いて、「その人がどういう職務内容を持って仕事をするのか、ということを明らかにする。」というもう一つの狙いもあって作っている。学校図書館の中身、特に司書の役割について延々と書いてある。確かにそのとおりだと思うし、行政的に努力してもらうといいと思う。

「学校図書館の充実」という項目だが、私はいろいろな学校図書館を見させていただいて感じたが、ひとつは、学校図書館はわかりにくいところが多い。ある本を置き「この流れで置いた方がいいのではないか。」という本が、別のところに置いてあったりして、気が付かないとわからないということがある。

中学校では、子どもたちが手にするきっかけで一番多いのは、表紙を見て「面

白そう」ということ。高等学校になると、おとなと同じで話題になった本を一番手にする。たとえばテレビで見た、映画になった、新聞広告で見たとか。
小中学校の場合は、本の置き方、見せ方も大事だと思う。
だから「学校図書館の充実」で最初に「わかりやすい図書館作りがされているか。」という項目あるべきだと思う。
子どもたちが図書館に行って、自分が探している本が、いちいちコンピュータで見なくても、目に見えるかたちで、見出しもわかりやすく、教科、単元に合わせ「こういう本がありますよ。」などとこまめに見せることをやっているかとか、そういうわかりやすさ、使いやすさというのがあるから、それは「できているよ。」とどこかの項目にひと言入れたほうが良いのではないか。

事務局　「学校図書館の充実」の「ケ」の項目でＮＤＣ「等」というところがそれである。国の通知ではＮＤＣとなっているが、以前、委員から「単元に応じた」というご意見もあった。このようなご意見も踏まえて「等」と括った。
学校図書館はわかりづらいということについては、私もそのようなことを感じており、来年１月に玉川小学校で研修会を行う。現在、玉川小学校で校長をしている稲垣達也先生は以前、荒川区の統括指導主事として学校図書館を担当していた。このとき「荒川区学校図書館支援事業」で区内の学校の指導に当たった藤田利江先生を継続的に玉川小学校に来ていただいて学校図書館の活性化に取り組んでいる。このような学校図書館を、市内小中学校の先生に見てもらい、学校図書館はこういうものだと研修していただきたいと考えている。

会　　長　見るのが一番というか、いい学校図書館を見て「なるほど」「こうしたい」とかそういうところにもっていけるといい。
次に、学校図書館に関わっている委員にお話いただく。

委　　員　市内の小学校で図書館支援をさせていただいている。
中神小学校では、読書旬間のイベントとして、校長先生はじめ、校内の先生全員が校内の各会場に別れ、一斉に読み聞かせをする。１ヶ月ほど前に、読み聞かせをする本のタイトルと、会場が発表される。読み聞かせをしてくださる先生方は当日会場へ行ってみないとわからない。本のタイトルと会場が大きく掲示され、その本が展示されるので、児童は担任がどの本を読むか知りたがるが、それは秘密で、どの本を聞きに行くかをずっと考えて、その日までかなり楽しみにしているようだ。拝島第一小学校では、地域の方々に、朝読書の読み聞かせのボランティアを回覧板で募集があった。私は２年目だが、今年はボランティアに登録した。月２回ほど朝読書の時間に、お父さんお母さんが全学年全クラスに一斉に読み聞かせをしている。お父さんお母さんは自分の子どものクラスに入る。保護者の都合がつかない場合は、地域のボランティアで登録している者が読み聞かせに行く。その場合は低学年が多い。高学年のクラスでは、お

父さんお母さんは熱心だと思うが、低学年の場合は、熱心ではあるが、下に小さいお子さんがいらっしゃって、なかなか朝早くから学校に行くことができないのではと感じている。本離れに関して、小学校で図書支援に入っていると、図書の授業では、本を２冊借りるが「本なんて面白くなくて、借りたい本がない。」と言ってくる子がいる。そういう時は「どんなことが好きなの？スポーツ？」と聞いて、７門のところに一緒に行ったり、「動物が好き？」と聞いて、４門のところへ連れて行ったりしていると、自然に本を手に取るようになっていくということがある。大切なことは、話しかける先生や支援員がいて「本が面白くない。」と言えることが、逆に良いのではと思う。何も言わず、本を借りることがなければ、図書の授業はあまり意味がないと思う。本好きの子どもは、もっといろいろな質問をしてくるので、こちらも勉強になる。子どもにとって、読書がいかに大切か、学力アップにつながるかということは、保護者には伝わっていない。以前、国際展示場で開かれるブックフェアで、ある学習塾の塾長の「子どもの読書と学力について」の講演を聴いた。申し込みされた父母はとても熱心に聴いていた。こういった講演をＰＴＡのイベントとして行ったらどうかと思う。以前、昭島市民図書館の子ども読書活動で開催された科学読み物研究会の白田みち子先生の講座を、拝島第三小学校のＰＴＡで開催されたことがある。また、つつじが丘南小学校のＰＴＡでも、昭島市民図書館の子ども読書活動で子ども寄席を公演したが、それを呼んだということもあった。だから、昭島市民図書館の子ども読書活動では、同じことの繰り返しで大勢いらっしゃると思うが、いろいろなイベントをしていただきたい。

会　　長　学校図書館に人がいるというのは重大事項で、教育委員会でも週一は市内小学校に入れてくれている。

本当は学校司書の資格を持っていて、毎日でも、というところを進めてほしいと思う。ＰＴＡの話があったが、いかがか。

委　　員　私は中神小学校でＰＴＡ会長をさせていただいているが、ＰＴＡも、企画の中では、読み聞かせを父母にお手伝いいただいて、子どものところへ来て読んでもらうのは、わりと頻繁にある。私はＰＴＡ会長を数年やっているが、企画段階で「子どもと読書を通じて触れ合うことを入れてもらいたい。」と話すと、読み聞かせは低学年から高学年まで比較的入れてもらえる。やはり、読み聞かせをした父母に聞くと「高学年は聞かないのではないかという感じでいたけど、行ってみたら意外に聞いてくれて、ちょっと感動した。」という感想があった。委員の話にもあったが、やはりそういったコミュニケーションは非常に大切で、親が読書の大切さを理解するようなことを経験して、子どもに読んであげて「子どもってこんなにリアクションがあるのだな」ということを実感してもらいたい。たとえばその人が４年生のときにやったら、５年生でも読み聞かせをやっ

てもらえないかと、学年委員にリクエストできる。そのような動きがあって、もしかしたら今の親と子の希薄になりつつあるコミュニケーションが読書を通じてできるのかなと思う。作者の言葉を借りて、親も理解しながら子どもに伝えることで、子どもも親が思っている以上にリアクションを示してくれるということは、ＰＴＡの役員から聞いている。やはり、高学年は「恥ずかしい」とか「おふくろが読みに来るのは聞きたくないよ。」というちょっと反抗的な子もいるが、小学生の場合、それはやはり喜びの裏返しであると感じることがある。ＰＴＡの協力というのは、実際に自治体としてやっているところもあるし、親に対しては、読書の大切さを理解してもらうにはどういった企画ができるのか、ＰＴＡからも働きかけていくということは非常に大切なのかなと感じた。

委　　員　小学校でも同じように、読み聞かせのボランティアをＰＴＡとは別に募集して、行ける人は行きましょうというかたちで参加はしていた。さすがに中学生になると読み聞かせはないので、朝読書する時間を 10 分設けていただき、その時間に何らかの本を読みましょうということで取り組んでくださっている。ただ、図書室は常時開いているわけではなく、図書ボランティアというかたちで親に声をかけ、登録していただいた方に、本の整理などをしていただける時だけ開けているという状態だと思うので、やはり誰か人がいないと、というのはあると思う。常に開けているというのはなかなか難しい状況なのかなと思う。

会　　長　子ども読書活動の実態調査は、いい調査結果が出るのももちろんありがたいが、啓発につながる、そこが一番大事だと思う。今日のご意見をいろいろ参考にしていただき、項目も詰めていただければと思う。

４　その他

事 務 局　いろいろな意見をありがとうございました。本年度の会議はこれで終了となる。３回にわたり貴重なご意見をありがとうございました。

以上